
双壁のはざま(元：双壁のはざま)

柳 怜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双壁のはざま（元：双壁のはざま）

【Nコード】

N9110W

【作者名】

柳 怜

【あらすじ】

これは二つの異世界で同じ時に生まれ落ちた魂の双子の物語二人は夢の中 二つ世界の狭間 でしか出会うことのないはずの二人。現実の世界で出会うはずのない二人、しかし二人は如何なる運命のいたずらか、二人が出会う時世界が向かうのは再生か破滅か

ブログ（前書き）

三話を間違えて削除したし、タイトルの間違えも有ったので新しく投稿しました。

プロローグ

私は何故生きているのだろうか

この世に生まれ落ちたことが既に罪であると言つのに何故私は生き
ているのだろうか

わからない。

しかし世界はそれでも私を弑ことはしない。

まるで私にはそれすらも許されてはないとでも言つように・・・

「ソルトどうした？」

またそつちの世界で何かあつたのか？」

「いや

なにもなかった」

ソルトと呼ばれた十そかこらの子供が、自分と全く同じ顔を持った
子供に应じる。

「それより今日交代の日だ。

早くしないと怪しまれるぞサイガ」

こうなるとソルトが意地でも喋らないと知っているサイガと呼ばれ
た子供は直接聞くよりも交代した方が速いとわかっているため、無
理に聴こうとはせず、お互いに立ち位置を入れ換える。

そして二人はそれぞれが属するのは別の世界へと向かつて覚醒を
始める。

お互いに立ち位置を入れ換える。

そして二人はそれぞれが属するのは別の世界へと向かつて覚醒を
始める。

成人の儀（前書き）

ソルトの生まれた森の名前がやっと決まりました。

でも、ソルトとサイガの性格天然にするはずだったのに何故だ？

書き直しは全くありません。

成人の儀

耳元でけたたましい音がする。

薄く目を開きそれが目覚ましの音であることを意味もなく確認する自分を自嘲する。ここは自分かもといた世界とは違うと言うのに。ソルトはそう思いながら目覚ましを止め、ベットから身を起こす。

「サイガいつまで寝てるのいい加減起きな・・・
て、あら珍しいわね。貴方があれだけで起きるなんて。」

ソルトを起こしに来たサイガの母親に『すぐ下に行く』と言って先に下に行ってもらう。下へ降りるために着替えようとしたところで窓に映った自分を正確に言うならその黒い髪と目を皮肉げに見た。故郷では忌み嫌われたこの髪と目もここでは珍しくも何ともないということが無性に可笑しく感じられた。

下の階に降りると見慣れた人影が見えた、だがその影は本来なら朝のこの時間この場所にはいないはずだった。

「シガラ、お前なんでここにいる!？」

ソルトはものすごい剣幕でシガラ睨みつけたが、シガラと呼ばれた方は意に介した様子もなく口に含んでいた食べ物をよく噛んで呑み込んでから。

「よう、ソルト遅かったじゃねえか、何時まで人を待たせるつもりだったんだよ。」

シガラが言い終わるとほぼ同時にソルトは机をたたきつけていた。

「その名をここで呼ぶなと何度言えばわかる!!」

決して大きな声ではないが、その声に込められた怒りは誤魔化し様がない。

「てっ、もしかして本物のソルトさん？」

「もしかしくなくてもそうだ!」

『ソルトの声にまずい!』とっ感じたのかシガラはすぐに

「うつわー、済まねえ。おれ昨日からお袋が出張で、朝飯は今日は

サイガの家で食うことになってたんだよ。そしたらサイガの奴に『今日の朝起きてきたらこう言ってくれ』って頼まれてたんだよ。」「シガラの言い訳を聞いた途端、脳裏にその時の様子が思い浮かんだ。ソルトは苦虫を十匹程噛み潰したような顔で小さく呟く。

「あいつ、そこだけ記憶をロックしてやがった！！」怒号が辺りに響き渡った。

ソルトの怒りがある程度鎮まるのをまってシガラが目を輝かせながら問い掛ける。

「えーっと・・・、さっきお前記憶がロック去れてたって言ってたよな？

それって、お前も向こうに関する記憶をロックしてるんだな？

何をロックしてるんだ？」

「何をロックしたかだと・・・

私がロックしたのは今日、成人の儀があるということだ！！」

それを聞いたシガラは口の中にあった食べ物のをどにつませて尋ねる。

「せ・・・成人の儀ってお前それ・・・」

「お互い様だ、

フッフッフ・・・

あっはっは」シガラの言葉を遮ってソルトの笑い声が辺りに響き渡る。

「お・・・きて

ソルト兄ちゃん起きてよ

成人の儀が始まっちゃうよ。」

木々の葉がそよぐ音が聞こえる。その音に混じって聞き慣れた弟のセルトの声が聞こえる。

その言葉の中に気になる台詞があつた。

「せ・・・いじ・・・んのぎ？」

「そう、成人の儀に遅れちゃうよ早く起きて。」

その言葉を聞いてサイガは飛び起きた。

「ちよつと待て、そんなのソルトから聞いてないぞ！」

それを聞いて今度はセルトが驚いた。

「えっ！？

てっことはもしかしてサイガ兄ちゃんなのーーーー！？」

「つまり、その神々の王がソルトに興味を持って逢わせると言つて来て、それを阻もうとした長老達が降神祭の前に成人の儀を行つてその後修行の旅に出そうとそういうことでもいいのかセルト？」

弟のセルトが落ち着くのを待つて成人の儀を行うに至つた経緯を詳しく尋ねる。

セルトが小さくうなずくのを確認して、サイガは内心で思わず『前から嫌われて居るのは分かっていたけど、ただ髪と目が黒いだけでそこまでするか！？

あのくそ爺度も、いつか絶対に殺してやる！！』と、声を出さずに誓う。

「あつ、あの、サイガ兄ちゃん、ロックは解けたの？」

サイガの思考が一区切りついたと判断してセルトはおずおずと声をかけた。

「いや、でも安心しろいつロックが解除されるかわたいたい検討かついてるから。」

不安そうな顔をしたセルトの頭をポンポンと軽くたたいて笑いかける。

支度を整えて、成人の儀が行われる広場に行く道すがら『如何して交代の日でもないのにソルト兄ちゃんとサイガ兄ちゃんが交代してるの』と聞かれサイガは周りに人がいないか注意深く確認して答える。

た。

「今日は、私の住んでる世界で学園祭というものがあるんだ、それでソルトは学園祭に行ったことがないし、私は降神祭を実際に見たことがないから交代しようということになったんだ」

「サイガ兄ちゃん学園祭って何なの？」

なるべく解りやすく説明したつもりだが、初めて聞く学園祭の意味は解らなかつたらしい。

「学校で行われる祭のことだよ。」

とつ、言っても学年やクラス、部活なんかで色んなことを遣つてどれが沢山の人達に楽しんで貰ったのかを競つたりすることだよ。」
セルトの亜麻色のくせつ毛を優しく撫でながら、なるべくこの世界の言葉で似た意味のものを選びながら学園祭について説明し、理解しようとしているセルトをほほえましげに見ていると。

前方からあまり聞きたくない声がした。

「おや？そこにいるのは今日めでたく成人の儀を迎える。」

ええと、何と言ったかな？」

自慢の金の髪を腰まで靡かせ厭味つたらしくそんな事を言うのは村長の息子のヴァステアとその取り巻き達だ。

サイガは機嫌が悪くなりながらも面には出さずソルトの掛けた口ツクが予想通り解除されたのを確認して、おもむろに口を開く。

「ソルトです。」

それよりも、ヴァステア様先ほど村長様がお探ししておりました。何か急ぎの用があつたご様子ですので直ぐに向かわれたほうがよろしと思います。」

ヴァステアとその取り巻きたちのこれ見よがしの嫌みを交わして、『こんなところで油を売っていていいのか』と権外に尋ねる。

それを聞いてヴァステア舌打ちをして足早に立ち去り、サイガはソルトの手を引きながら広場へと向かつた。

ソルトとシガラが学校に来た時には準備は殆ど終わっていてあとは各自が衣装を着るだけだった。

「遅い！！」

他の皆はもう来てるのに、主役が遅れて来てどうするの！！」

ソルトは自分の教室に入るなりクラス委員のアンジュが短い焦げ茶色の髪を逆立てながら怒鳴る。

「遅いって、言ってもリハーサルまでまだ一時間以上あるだろう？
だいたいわ・・・俺は好きで主役になったんじゃない、文句があるなら今すぐ他の奴が変わってくれてもかまわないが？」

「ちよつ、何言ってるのよ！？」

変わるって、台詞覚えてるのあんただけなのよ」

「まさか本気でそんなこと言ってるの？」

俺の役がやりたくて本番の今日まで諦めずに意地らしく頑張ってる人たちがいるみたいだね。」

アンジュの狼狽した声にソルトが「何を言ってるんだ、俺の代わりなんていからでもいるだろう。」と言う風に笑顔で切り返す。

「おーい、二人ともいい加減リハーサル行かねえと時間がなくなっちゃうぞ。」

「ああ、シガラ居たのか」

ソルトとアンジュの口論に割り込んだのは呆れた口調のシガラだった。

成人の儀サイアレルの森の中心部で行われる。

そのサイアレルの祭壇と呼ばれる場所の本当の名を知のことを許されているのは最長老と五人の長老たちだけだと言われている。

石畳みを敷き詰められた広場、中央に位置する祭壇にはめ込まれた

緑の輝石が神々しく輝いている。

「これより成人の儀を行う」

長老の重々しい声が辺りに響き渡り、サイガは祭壇へと進んでいく。

「我、黒のソルト

今、成人を迎えし証しとして我が半身となりし者を求めん

我と共に試練に耐え得る者よ

古よりの約条によりて我が下に姿を現せ」

サイガが定められた通りの手順に従い聖句を唱える。

聖句を唱え終わると本来ならば、自らの半身となる筈の神獣が現れる筈なのだが、白い煙が巻き起こりサイガと同じくらいの人影をした者が佇んでいる。

召喚されし者？（前書き）

遅くなって済みません

三話を投稿したのは良いんですが、間違えて削除してしまい、三話の内容が今一気に入らなかったのをこれ幸いと書き直しました。

召喚されし者？

晴れた霧の中、其処に佇んでいた者を見て誰もが一樣に言葉を失う。其処に佇んでいたのはソルトとサイガの二人であった。

召喚された者が召喚した物と全く同じ姿をしている……………いやそれ以前に、人の姿をしている事に驚きを隠せずにはいた。

召喚の儀は本来、自分の半身たる存在になる神獣を呼び出すための儀式である。

呼び出される神獣は本来ならば、全て獣の姿をしている。

力の強い神獣ならば人型になる事も出来るが、そんな事が出来る神獣は極僅かであり、抑々召喚されたばかりの神獣は、本来の姿で現れるか、本来の姿とよく似た獣の姿をとる。

だが今回召喚された神獣は、人型をしている。

それはつまり、召喚された神獣がそれだけ巨大な力を持っていると言う事になる。

更にその神獣は、召喚した者つまりはソルトと全く同じ姿をしている。

「ソルト何故お前が此処に居る!？」

サイガは本来なら神獣が召喚されるはずであるのに、自分のもう一人の兄弟とも言つべき存在であり、本来ならば、自分と入れ替わって学園祭で劇を演じているはずのソルトがいるのに驚きを隠せなかった。

「私を知るか!!」

劇が終わって、休憩に入った途端に光だが闇だかに包まれたと思つたらこの森にいたんだからな。」

ソルトの方も、状況が分からずに自分に起こった出来事を口にする。

「何をしておる。」

神獣が召喚されたのならば、速く契約を結ばぬか!!」

その声をかけたのは、いち早く衝撃から抜け出せた最長老で会った。最長老の声によって、周りは何とか静まり落ち着きを取り戻す。

ソルトとサイガも落ち着きを取り戻す。

ソルトはとに角、今の現状知ることが先決であると、判断しサイガもソルトと同じ判断をしソルトに今の状況を何時もの様に送る。

「……………」

二人は顔を見合わせ深いため息をつく。

「いい加減……」

「召喚の儀は失敗しましたよ。」

貴方達が信じる信じないは別としてね。」

痺れを切らした、最長老が二人を促そうとするが、その声を遮って二人同時に口を開く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9110w/>

双壁のはざま(元：双壁のはざま)

2012年1月13日16時57分発行